

岩手山・平笠岩屑なだれが縄文人に与えた影響 — 土地の選択から見る縄文人の災害適応 —

菊池 駿貴
KIKUCHI Toshitaka

岩手山・平笠岩屑なだれが縄文人に与えた影響

— 土地の選択から見る縄文人の災害適応 —

Catastrophic impacts of "Hirakasa" debris avalanche disaster
in Iwatesan Mountain, northeastern Japan: Adaptation
for the land use formation through the Jomon periods.

菊池 駿貴 KIKUCHI Toshitaka

要　旨

約6,000年前の縄文時代早期から前期の間に、岩手山東側で起きた平笠岩屑なだれにより、岩手山北東側部では19km離れた場所にまで岩屑なだれの堆積が確認されている。岩手山周辺では縄文時代早期から前期にかけて遺跡数が増加しているが、その傾向は岩手山の南側の地域に強く見られる事から、岩手山の南側に逃れるような災害適応を取ったのではないかと考えられていた。また堆積層が厚く堆積範囲における堆積層下層の調査が困難であることや、周辺の遺跡に関しては散布地が多く、発掘調査を行っていない遺跡が多い事から物質文化の変化から考察を行う事は厳しい。そのためQgisを用いた遺跡立地条件の違い(標高・傾斜角度・地形分類)から、平笠岩屑なだれに対する災害適応についての考察を行った。対象地域を岩手山の北側・南東側・南側の地域に分け、それぞれの遺跡立地条件を時期ごとに比較したところ北側の地域と南側の地域では立地条件に差異が見られ、南東側の地域ではやや北側の地域に類似する傾向も見られた。特に北側の地域では低地に平笠岩屑なだれが堆積していたためか、他の地域よりも標高の高い場所に遺跡を構える傾向が見られる。また発掘調査を行っており明確な土器型式を持つ遺跡を地域・時期ごとに比較した結果、全域で前期初頭の大木1・2式が出土している。岩手山の南東側・南側の地域では土器の出土のみだが、北側の地域では土器に伴う遺構も検出されているため、平笠岩屑なだれの堆積後も北側の地域で生活をしていた可能性が示唆される。これらの事から岩屑なだれ等の災害の後に遠方へ避難するだけではなく、被災地の周辺の高地で生活を継続していたといえるだろう。

キーワード: 災害適応 岩手山 平笠岩屑なだれ 遺跡立地 縄文時代早期・前期

1. はじめに

火山の噴火や津波・地震・なだれなどの痕跡は、ある一定範囲内で広域に分布し災害痕跡として現代まで残る。それらの痕跡は諸分析により、発生した年代が特定され広域に分布する事から鍵層として年代の特定などに使用される。火山灰等の鍵層を年代の特定に使う事例は多いものの、災害痕跡を鍵層とは別の視点で分析する事例は限定的になっている(町田1977、丸山2015)。考古学における災害痕跡のあり方は鍵層として年代を特定し、遺構・遺物の編年研究にのみ使用されるだけではない。災害痕跡から復元すべきことは人類がどのような災害に遭い、その災害にどのように対応したのかという災害に関する人類史である(丸山2015)。

対象とする岩手山の東側では約6,000年前に平笠岩屑なだれという山体崩壊が起こっており(土井2000、井上2009ほか)、井上氏は平笠岩屑なだれの堆積後に岩手山の南側の地域に遺跡が増加すると考察している(井上2009)。しかし井上氏の先行研究には実際の遺跡数など、詳細な記述は見受

けられない。岩手山周辺の地域では高速道路やダムの建設に伴い、縄文時代前期から前期までのべ200近くの遺跡が発見されている¹⁾。しかし平笠岩屑なだれの堆積層は最大10mに達し、堆積層の平均の厚さは6mになる(土井2000)。そのため平笠岩屑なだれの堆積前後の遺構類の検出事例は少なく、出土遺物類は型式がはっきりとしないという現状もある。そこで対象地域内での遺跡の立地条件などの地理的側面から、平笠岩屑なだれの堆積後に岩手山の南側の地域に遺跡が増加するのか。また岩手山の南側の地域に遺跡が増加する以外にも、平笠岩屑なだれの災害に対する人々の適応はなかったのか言及する。

2. 対象地域と平笠岩屑なだれ

(1) 対象地域

本論文で対象とする地域は岩手県の西部に位置する岩手山を始めとし、岩手山周辺の地域とする。岩手山は岩手県西部の八幡平市・雫石市・滝沢市の3つの市町村に跨る火山群

の総称で、標高2038mの高さになる。岩手山の基盤層は約100万年前に形成された渋川層であり、岩手山は約70万年前に形成され約30万年前から火山活動が活発化し現在に至るまで火山活動を行っている活火山である（土井2000・国土地理院2014）。

本論文における対象地域である盛岡市・零石市・滝沢市・八幡平市・岩手町においては、主に盛岡市で旧石器時代と縄文時代時代草創期の遺跡が発見されている。旧石器の遺跡では、玉山区の小石川遺跡から尖頭器と剥片が、同じく玉山区の大橋Ⅲ遺跡からナイフ形石器と細石刃が出土している（村木・米田2009、盛岡市遺跡の学び館2006）。また縄文時代草創期の遺跡としては盛岡市の大新町遺跡から、縄文時代草創期の爪型文土器が出土している（神原2009）。

縄文時代早期の土器の器形は草創期からの流れを汲み、底部が尖底・丸底が多いが平底へ変化する流れがみられる。また対象地域においては回転押型文や貝殻文の施文された土器が出土する（西根町史編集委員会1986）。また縄文時代早期末葉になると、胎土に植物の纖維を入れる纖維土器が作られるようになる。零石川流域に位置する下猿田遺跡では、回転押型文や貝殻文の他にも沈線文や条痕文を持つ土器も出土している（零石町史編集委員会1979）。

縄文時代前期の土器の器形は基本的に平底をなすが、尖底の器形をなすものも少数であるが残る。北日本の縄文時代前期では北側を中心とする円筒式土器圈と、南側の大木式土器文化圏に大分されており、北緯40度付近が二つの文化圏の境界線となり（西根町史編集委員会1986）、対象地域がまさにその境界線に位置する。また土器の胎土に纖維を入れる纖維土器は縄文時代前期初頭まで残り、羽状縄文を施文する。その後は沈線文や貼り付け文を施文するようになる（零石町史編集委員会1979）。

（2）平笠岩屑なだれ

平笠岩屑なだれ堆積物は、岩手山を起源とする火碎サージを伴う山体崩壊の総称である。平笠岩屑なだれは層厚1mを基準に1mより薄い薄層部と、1mより厚い厚層部に分類されており、厚層部の層厚は5～10m以上と考えられている。平笠岩屑なだれの分布域は岩手山北東麓で、崩壊源から18～19km離れた地域まで広く分布する。また厚層部の約80%を岩塊相が占め、岩塊相は10cm～5m大の安山岩～玄武岩溶岩片を不均質に含んで堆積している（土井2000）。

狐森山において平笠岩屑なだれの下層から出土した土器

片が縄文時代早期末葉の土器であったことから、平笠岩屑なだれの堆積時期は縄文時代早期から前期の間に堆積したと考えられている。また平笠岩屑なだれの堆積層からサンプルした14個の炭化物の炭素14年代測定値（土井2000）から、本稿における平笠岩屑なだれの堆積した年代を $5,880 \pm 130$ y.B.P（橋1978）とする。

平笠岩屑なだれは岩手山の山頂部で発生したと考えられているが、この山体崩壊に伴う降下火碎堆積物は現在も見つかっていない。しかし堆積物の中に火山ガラスが含まれることから、火碎サージの原因は山体崩壊による減圧が原因ではないかと考えられる。また平笠岩屑なだれの堆積物は、松川や赤川などの岩手山北東麓の河川をせき止めていたことがボーリング調査から明らかになっている。その他平笠岩屑なだれの堆積域では各地に平笠岩屑なだれに関係する湿地堆積物が残っているため（土井2000）、平笠岩屑なだれが岩手山の北東地域に与えた被害の大きさがうかがえる。

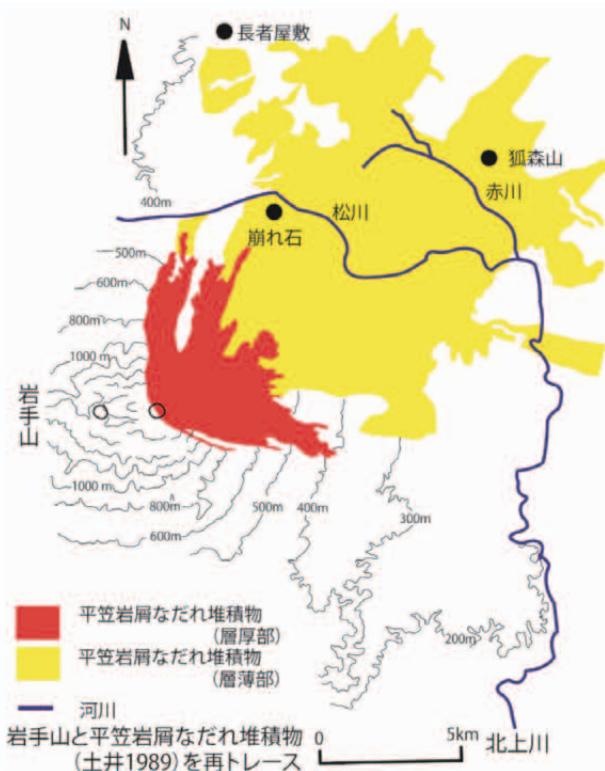


図1 平笠岩屑なだれの体積域と層厚の分類と
平笠岩屑なだれ関連遺跡

3. 先行研究

平笠岩屑なだれの堆積域外では縄文時代早期から後期までの遺跡が存在することに対し、平笠岩屑なだれの堆積域内では縄文時代中期以降の遺跡が確認されるものの縄文時代前期の遺跡は確認されていない（土井2000）。

狐森山では平笠岩屑なだれの下層から縄文時代早期中葉の土器片が見つかっており、この土器の表面には絡状体圧痕が施されている常世2式土器である。また崩石遺跡では溶岩の巨岩塊の間から土器が検出されており、堆積状況から自然に岩塊の間に堆積した可能性は低いとしている（土井2000、井上2009ほか）。長者屋敷遺跡では、岩塊の間から完形ないし復元可能な土器や磨製石斧・石皿・磨石がセットで出土した事例も見られる（財団法人岩手県埋蔵文化財センター1980）。平笠岩屑なだれの堆積域内では縄文時代中期以降の土器の散布が確認されているほか、縄文時代晚期のキャンプ地以外住居跡は確認されていない（土井2000）。そのことから縄文時代後期中葉頃の平笠岩屑なだれの堆積域内では、岩塊を利用した祭祀場が存在しており、何らかの形で土器や磨製石製品などが埋納された可能性を述べている（井上2009）。

またそれら結果から平笠岩屑なだれの堆積域は、岩塊を主体とする地形なため縄文人が居住できる環境ではなかつたことが考察される（土井2000）。また井上氏は岩手山の南側の地域において縄文時代前期初頭の遺跡が多くなるのは、平笠岩屑なだれから逃れるためであったという見解を述べている（井上2009）。

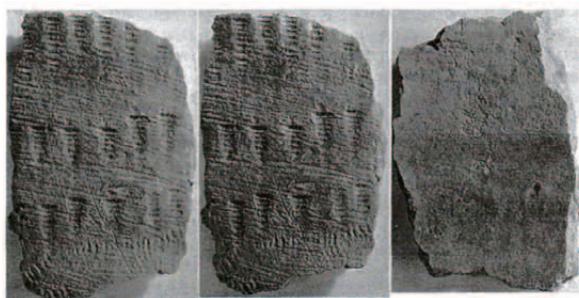


図2 狐森山採取の常世2式土器

4. 遺跡分布図

(1) 縄文時代早期の遺跡分布図

縄文時代早期と縄文時代前期の間に複数の時期で繰り返し使用されていた遺跡は、縄文時代早期と縄文時代前期の

遺跡分布図のどちらにも含まれている²⁾。縄文時代早期の遺跡数は63遺跡であり、北側の地域で8遺跡、南東側の地域で42遺跡、南側の地域で13遺跡となっており、南東側の地域に7割近くの遺跡が立地している。以下、対象地域を北側の地域を「領域A」、南東側の地域を「領域B」、南側の地域を「領域C」と呼称する。

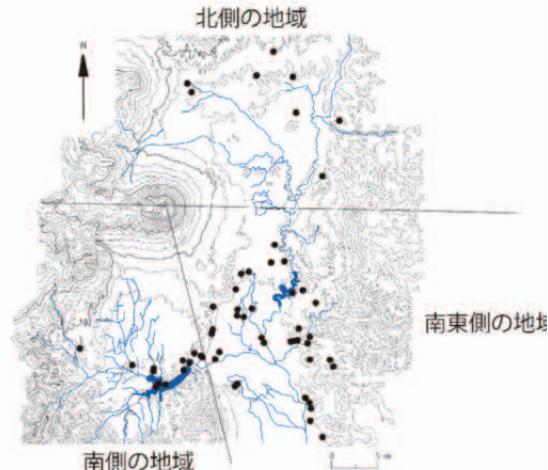


図3 縄文時代早期の遺跡分布図

(2) 縄文時代前期の遺跡分布図

縄文時代前期の遺跡分布図にも縄文時代早期の遺跡分布図と同じく、縄文時代早期の時期の痕跡を持つ遺跡も含まれている。縄文時代早期の遺跡数が63遺跡であったが、縄文時代前期の遺跡数は早期の遺跡数の2倍近くの102遺跡となっている。領域Aが21遺跡、領域Bが64遺跡、領域Cが17遺跡となっており特に領域Aにおける遺跡数の増加率が高くなっている。

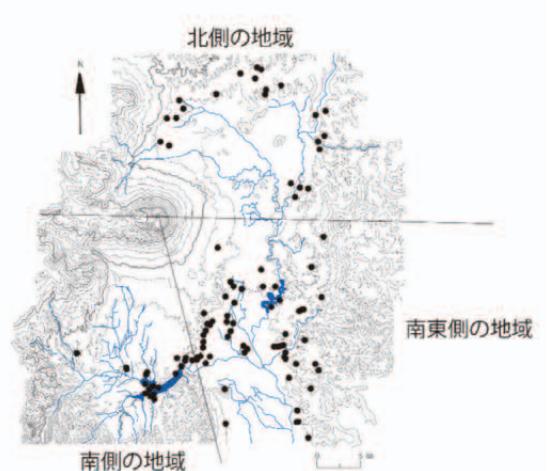


図4 縄文時代前期の遺跡分布図

5. 地理的分析

(1) 標高

図5が国土地理院の岩手山周辺の標高値を参考に、Qgisを使用し作成した標高の変化を表した図になる。標高100mから標高500mの間の標高のみ1色30m間隔で着色されており、最も標高が低い場所が濃い青色になっており標高500m以上が薄い紫色となっている。詳細は凡例を参照されたい。

縄文時代早期遺跡の標高

縄文時代早期の遺跡は基本的に標高140mから標高200mの間に多く分布している。しかし領域Aにおいては標高300m以上の標高の高い場所にも遺跡が立地しており、標高200m以下では遺跡が発見されていないのは、標高200m以下の場所は平笠岩屑なだれが堆積しているため、平笠岩屑なだれより下層にある縄文時代早期の遺跡が発見されにくいくことが関わっているだろう。

領域Bと領域Cにも標高300m以上の場所にも多少遺跡は存在するものの、標高200m以上の場所には基本的に遺跡が

存在しない。領域Cに標高440mの場所に1遺跡あるが、基本的に領域Bと領域Cでは標高200m以下の場所に遺跡が多い。領域Aでは標高300m以上の場所にも遺跡が立地することから、他の地域との地域差が表れているといえる。

縄文時代前期遺跡の標高

縄文時代前期になると、標高の高い場所に遺跡が多くなり、最高で標高440mの場所にまで遺跡が立地している。また領域Aでは標高200m以上の標高の高い場所に遺跡が多く立地し、領域Cでは標高200m以下の標高の低い場所に遺跡が多く立地する傾向がみられる。それに対し、領域Bでは縄文時代早期では標高の低い場所に遺跡が多かったが、縄文時代前期には標高の高い場所にも遺跡が立地する傾向がみられる。また領域Bの中でも標高の高い場所に立地する遺跡は領域A寄りの場所に立地するため、縄文時代前期の領域Bは領域Bの中でも領域A寄りの場所は領域Aの影響を受けていた可能性がある。

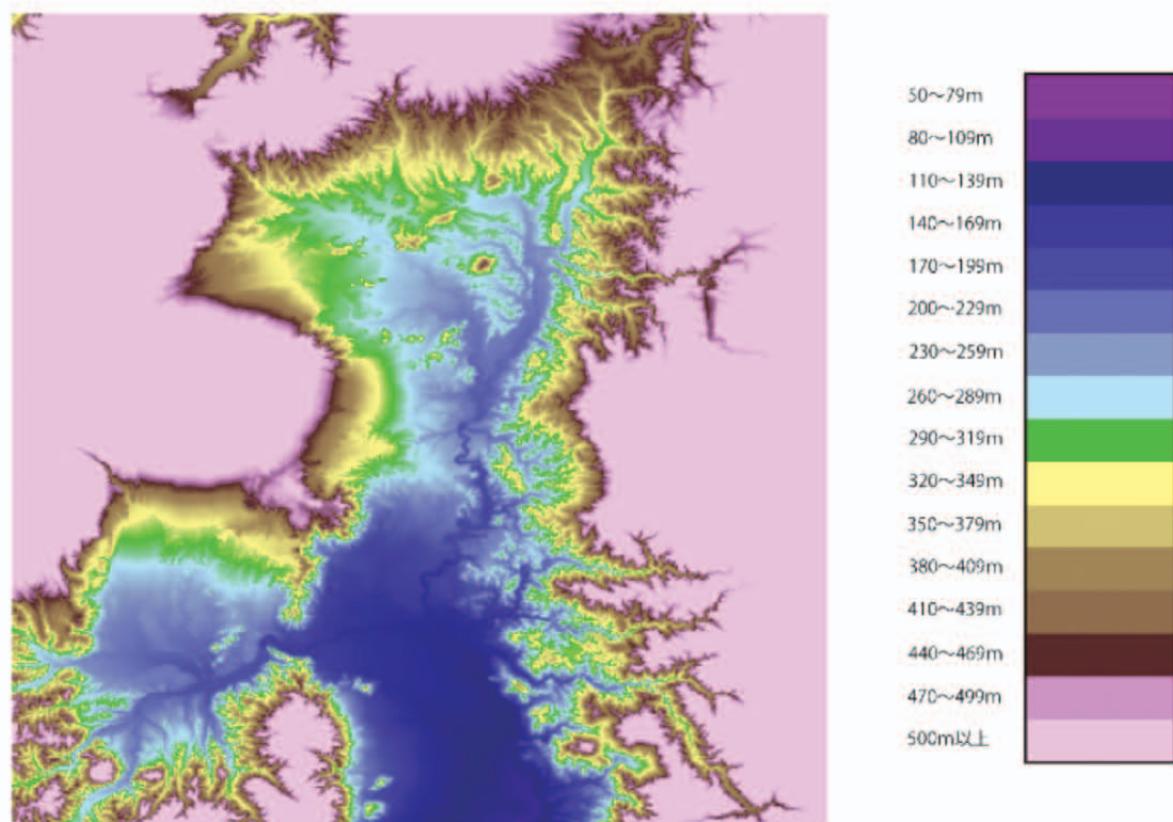


図5 岩手山周辺の標高

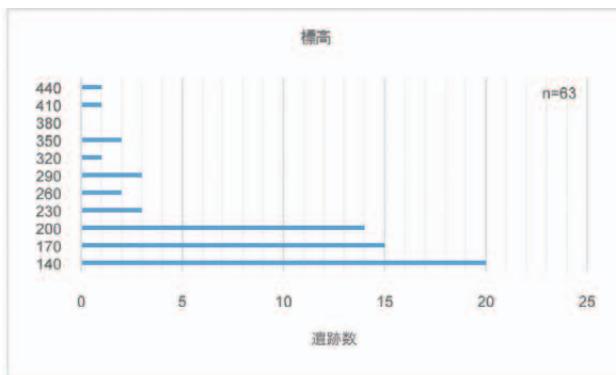


図6 縄文時代早期遺跡の標高（全体）

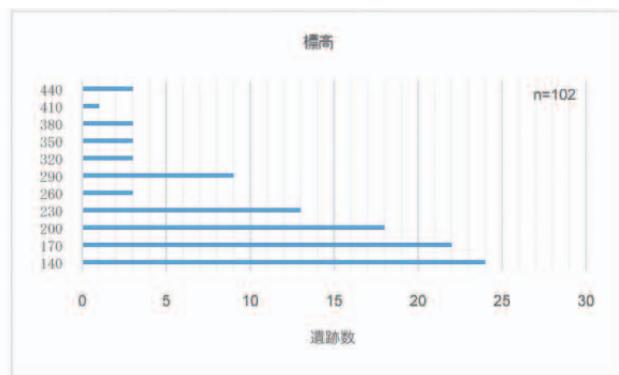


図9 縄文時代前期遺跡の標高（全体）

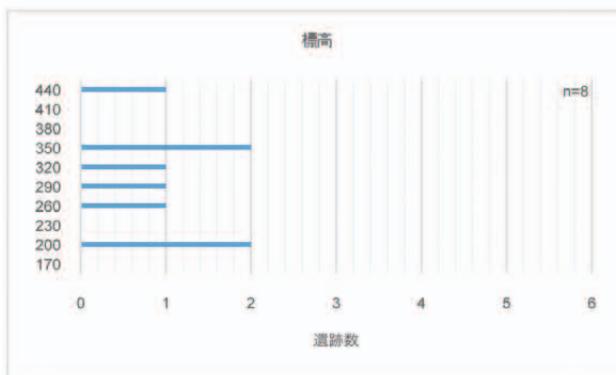


図7 縄文時代早期遺跡の標高（領域A）

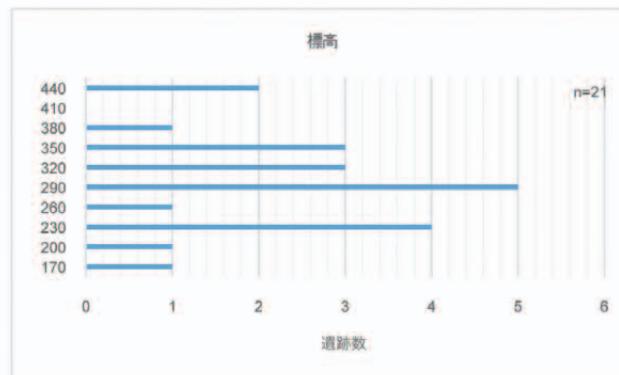


図10 縄文時代前期遺跡の標高（領域A）

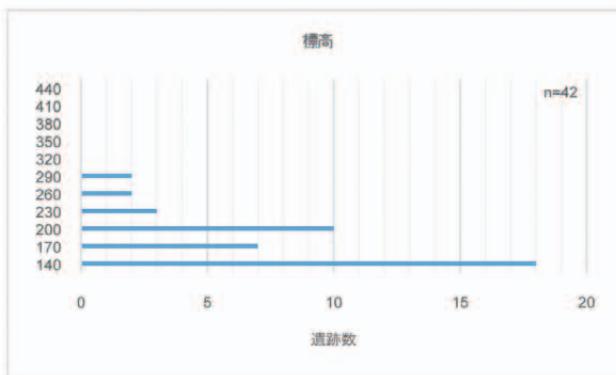


図8 縄文時代早期遺跡の標高（領域B）

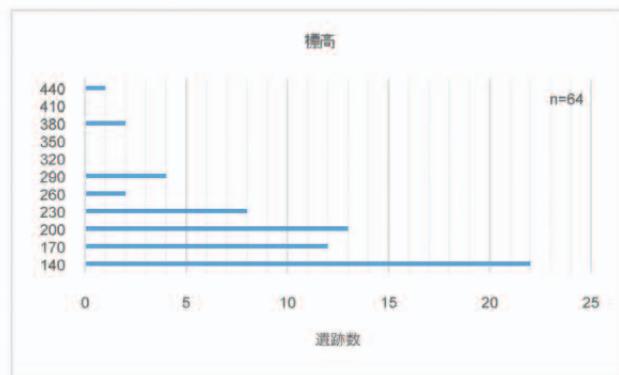


図11 縄文時代前期遺跡の標高（領域B）

(2) 傾斜角度

図12が岩手山周辺の傾斜角度を表した図になる。傾斜角度0度から90度までの角度が3～4度変化ごとに色彩を変えて着色してある。黒で着色されている場所は河川など地面が傾斜していない場所になる。白色で着色されている場所が傾斜角度0度になっており、順に傾斜角度が高くなっていく。詳細は凡例を参照されたい。

縄文時代早期遺跡の傾斜角度

縄文時代早期の傾斜角度から全体的に傾斜角度10度以下の場所を選択して居住していたことが分かる。特に領域Aと領域Cでは傾斜角度10度以下の場所にのみ遺跡が立地するため、比較的平坦な場所を選択して居住していたことが分かる。また領域Bでは傾斜角度10度以上の場所に遺跡が立地しているが、領域Bでは傾斜角度の高い丘陵地や山地が多い。このことからこのような結果になったと考えられる。

縄文時代前期遺跡の傾斜角度

縄文時代前期になると傾斜角度10度以下の場所に存在する遺跡が大半を占めるようになるが、その傾向に反して領

域Bでは傾斜角度の強い場所にも遺跡が存在するようになる。しかし図12の標高の変化を表した図と比較してみると、傾斜角度の強い場所に存在する遺跡のほとんどが正面に平地を背面に斜面を持つ場所に立地している。このことから傾斜角度の強い場所に存在する遺跡は厳密には、平地から斜面に変わる場所を選択していた遺跡である可能性が高い。縄文時代前期は傾斜角度の弱い場所を主に選択し、背後に斜面を持つ平地を選択する遺跡もみられる傾向がある。このことから縄文時代前期になって居住域に変化があり、この居住域の変化には他の地域との関わりがあった可能性高いと推測できる。

また領域Aにおいても傾斜角度30度以上の地域に遺跡が立地するようになるが、その理由として2つの仮説が考えられる。1つ目が領域Aの大半は平笠岩層なだれの体積域にあたるため、平笠岩層なだれの影響を受けて傾斜角度の高い場所を選択して居住せざるを得なかった可能性がある。2つ目が領域Bの地域でみられるように他の地域との関わりがあった可能性がある。

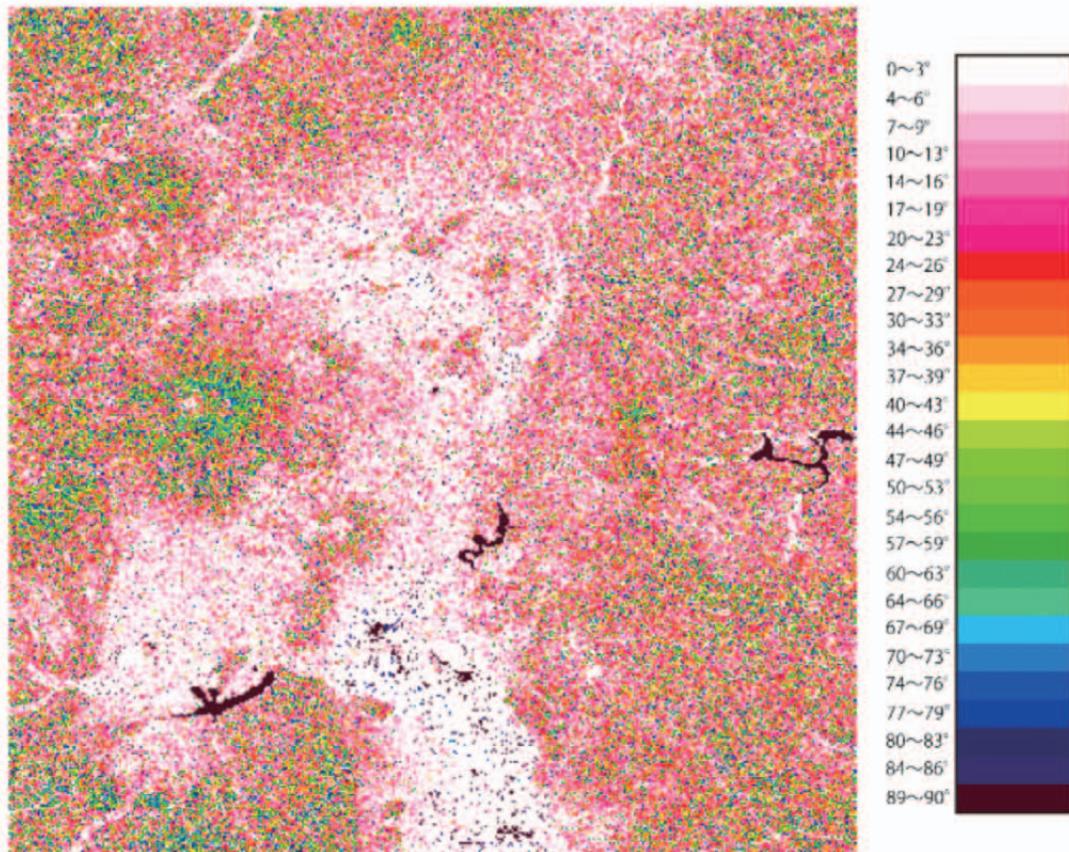


図12 岩手山周辺の傾斜角度

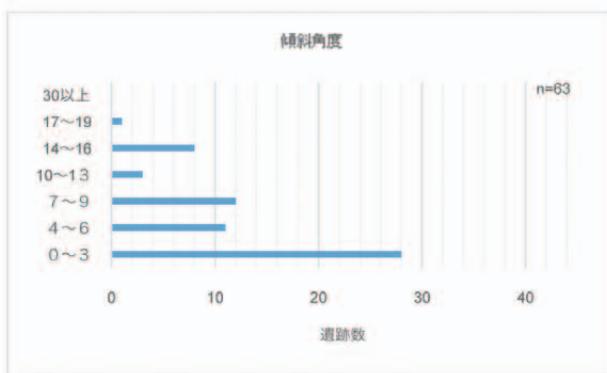


図13 縄文時代早期遺跡の傾斜角度（全体）

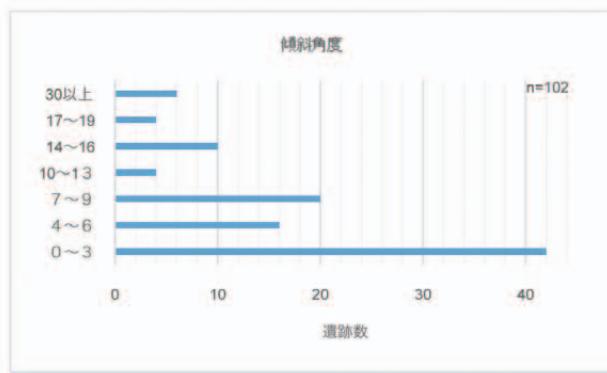


図17 縄文時代前期遺跡の傾斜角度（全体）

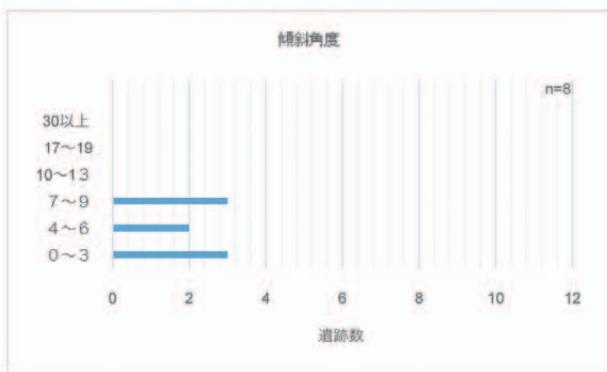


図14 縄文時代早期遺跡の傾斜角度（領域A）

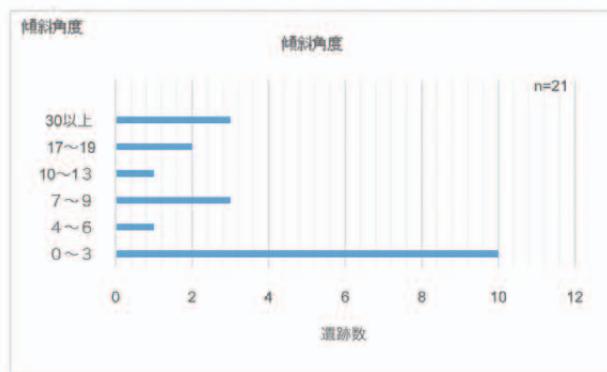


図18 縄文時代前期遺跡の傾斜角度（領域A）

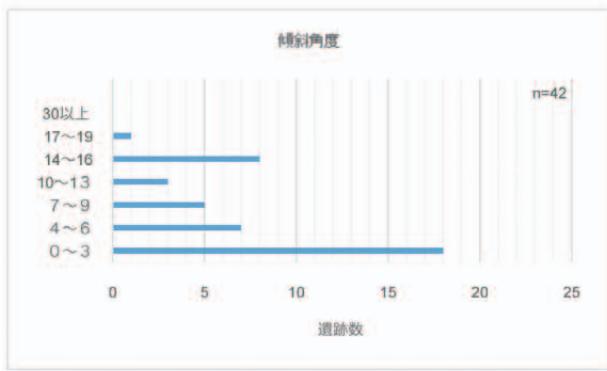


図15 縄文時代早期遺跡の傾斜角度（領域B）

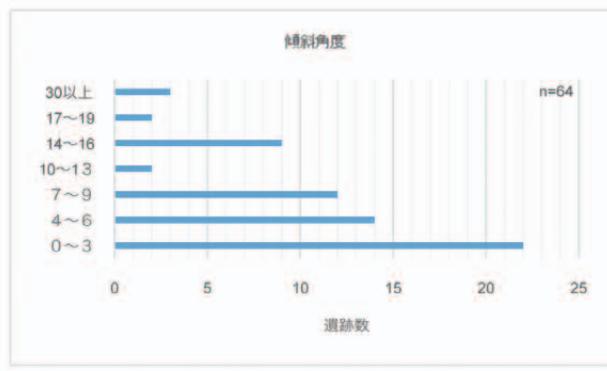


図19 縄文時代前期遺跡の傾斜角度（領域B）

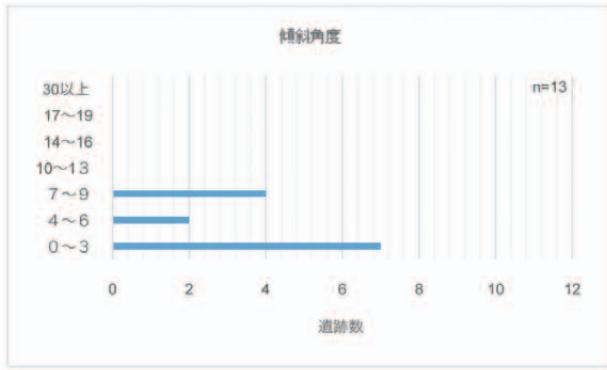


図16 縄文時代早期遺跡の傾斜角度（領域C）

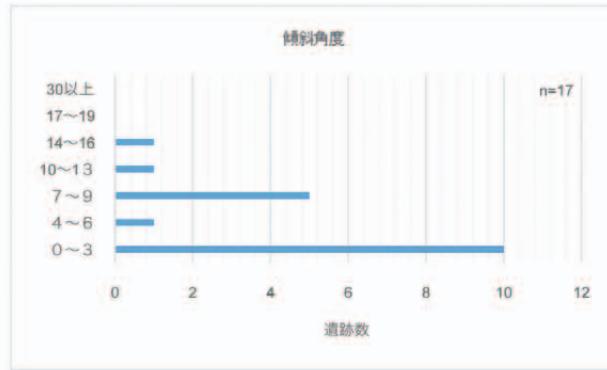


図20 縄文時代前期遺跡の傾斜角度（領域C）

(3) 地形分類

図21が本稿で地形分類に使用した地形分類図であり、対象地域付近を拡大・切り取りした図となっている。この地形分類図は昭和49年に経済企画庁からの依頼を受け、岩手大学の教授らによって調査・制作された。中央付近の赤のドット状の場所が岩手山となっており、岩手山周辺の赤と黒の縞状の場所が得に遺跡が多く立地する小起伏火山性丘陵地となっている。詳細は凡例を参照されたい。

縄文時代早期遺跡の地形分類

縄文時代早期では、領域Bと領域Cには扇状地性低地に遺跡が存在するが、領域Aでは扇状地性低地に遺跡が立地していない。しかし領域Aは平笠岩屑なだれの影響を受けていたため、扇状地性低地に存在する遺跡発見されていない可能性もある。また領域Aでは火山性ではない山地や段丘で構成された場所が対象地域東側にあるが、火山性の丘陵地に遺跡が多く立地する傾向がみられる。逆に領域Bでは

東側の火山性でない山地や段丘に立地する遺跡が多い。そのことから領域Aでは火山性の丘陵地を選択して居住する傾向が強いことが推測される。

縄文時代前期遺跡の地形分類

縄文時代前期では縄文時代早期と同じく、扇状地性低地よりも丘陵地や段丘や小起伏山地や小起伏火山性丘陵地などの高地を選択して遺跡を形成する傾向がみられる。また領域Aにおいて縄文時代早期では遺跡が存在しなかった扇状地性低地に遺跡が存在し始めるが、小起伏火山性丘陵地と扇状地性低地の境界付近にあたるため縄文時代早期よりも低地に近い場所を選択する傾向がみられる。さらに領域Aにも火山性でない丘陵地や段丘・山地があるにもかかわらず、火山性の丘陵地を積極的に利用している傾向がみられる。また領域Bでは縄文時代前期になると、火山性ではない丘陵地や段丘・山地を利用する傾向が強くなる。

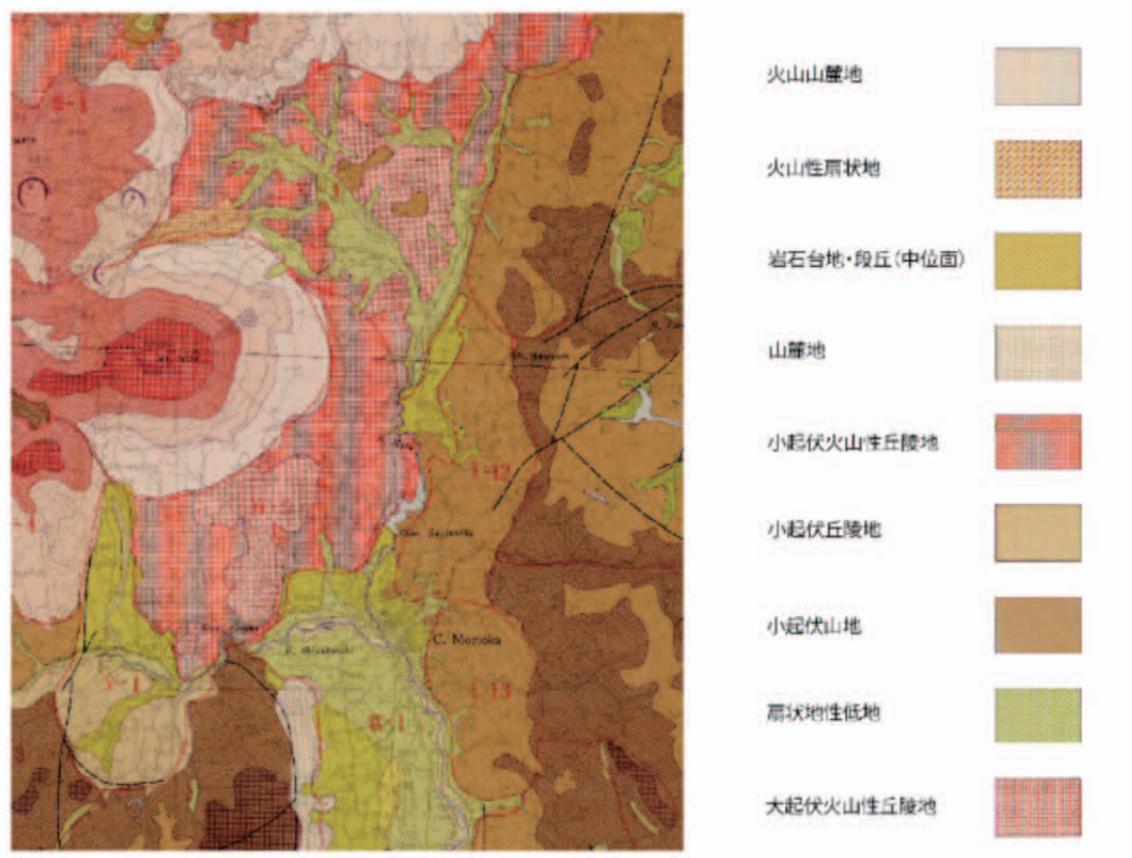


図21 岩手県の地形分類図

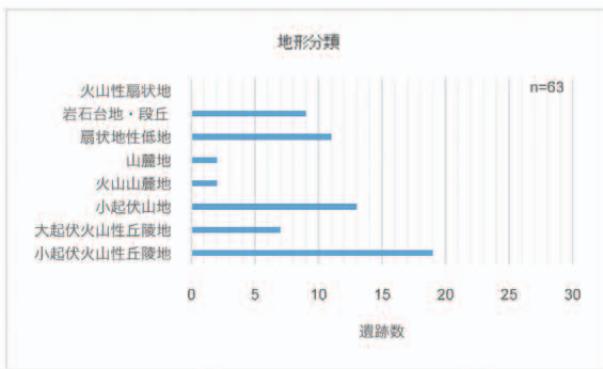


図22 縄文時代早期遺跡の地形分類（全体）

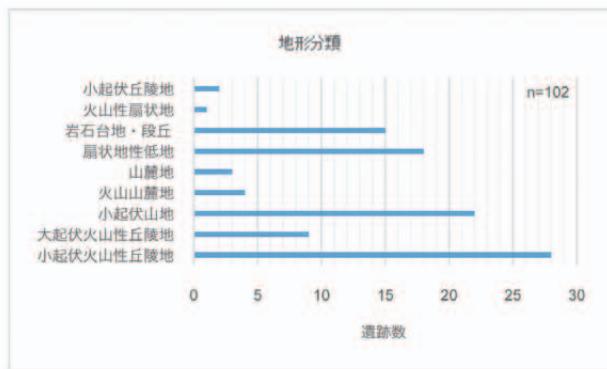


図26 縄文時代前期遺跡の地形分類（全体）

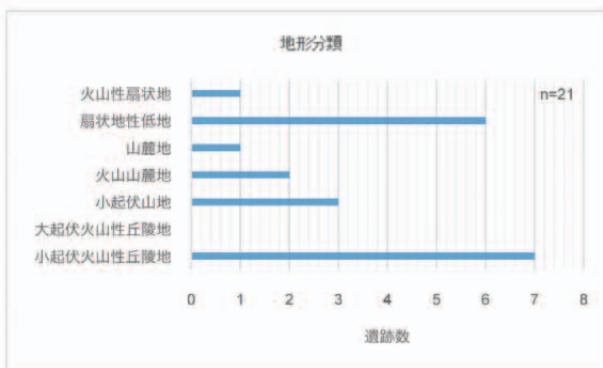


図23 縄文時代早期遺跡の地形分類（領域A）

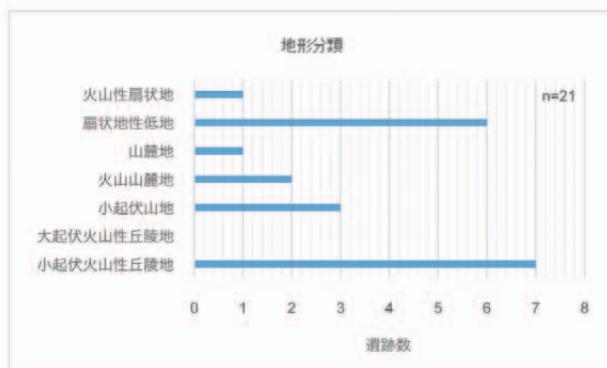


図27 縄文時代前期遺跡の地形分類（領域A）

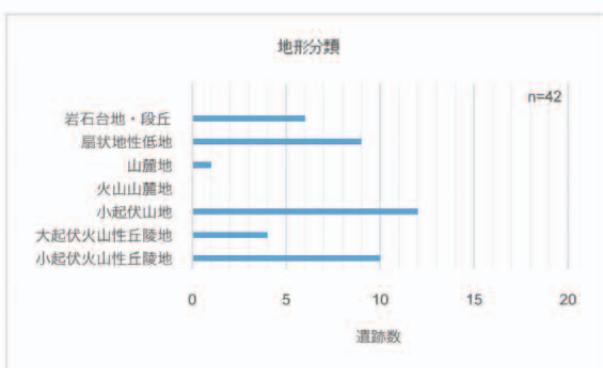


図24 縄文時代早期遺跡の地形分類（領域B）

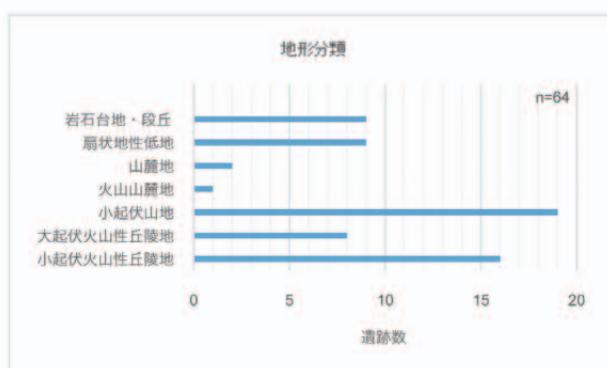


図28 縄文時代前期遺跡の地形分類（領域B）

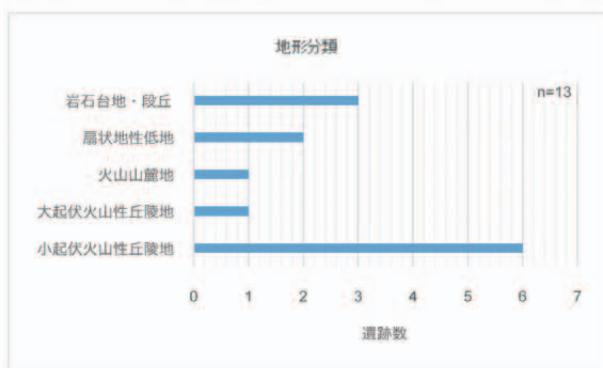


図25 縄文時代早期遺跡の地形分類（領域C）

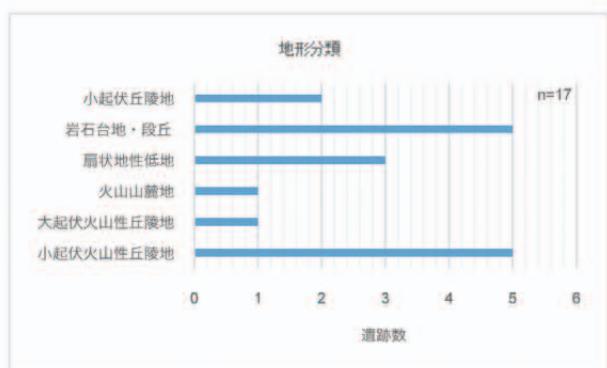


図29 縄文時代前期遺跡の地形分類（領域C）

6. まとめ

(1) 標高

岩手山周辺の縄文時代早期から前期までの遺跡が立地する場所は、標高140mから標高440mの間になる。標高300m付近までが縄文時代早期の主な居住域であったが、縄文時代前期になると標高440mまで居住域がひろがる傾向がみられる。また領域Aでは縄文時代早期から標高の高い場所に遺跡が多く、縄文時代前期になり更に標高の高い場所に遺跡が多くなるため、総じて標高の高い場所に遺跡が多く立地する地域である。領域Cでは、早期と前期ともに標高200m前後の標高の低い場所に遺跡が多く立地する傾向がみられる。領域Bでは縄文時代早期までは標高200m以下の標高の低い場所に多くの遺跡が立地しており、領域Cと似た傾向がみられたが、縄文時代前期になると標高の高い場所にも遺跡が立地し始めるため、領域Aの影響を受けている可能性がある。

平笠岩屑なだれの堆積域と重なる領域Aでは縄文時代早期から標高の高い場所に遺跡が多い傾向がみられており、縄文時代前期になると更に標高が高い場所に遺跡が増ええる。またこの傾向は領域Bでもみられ、特に領域Bの中でも領域Aに近い場所に存在する遺跡にこの傾向が強い。また標高の高い場所に存在する遺跡は平笠岩屑なだれの堆積域を囲むように存在するため、標高の高い場所に存在する遺跡は平笠岩屑なだれの堆積域内に居住していた人々に関係がある人々である可能性がある。

(2) 傾斜角度

岩手山周辺の縄文時代早期から前期までの遺跡が立地する場所の傾斜角度は、0~60度までの間になる。しかし、ほとんどの遺跡が傾斜角度0~3度の間の場所に存在しており、傾斜角度10度を超える場所に存在する遺跡は極端に少なくなる傾向がみられる。縄文時代早期では傾斜角度20度以下の場所に遺跡が立地していたが、縄文時代前期になると傾斜角度30度以上の場所にも遺跡が立地し始める傾向がみられる。また縄文時代前期の中でも傾斜角度30度以上の場所に遺跡が立地するのは領域Aと領域Bのみで、領域Cには傾斜角度30度以上の場所に遺跡が立地することはない。

縄文時代前期になると、傾斜角度30度以上の場所にも遺跡が立地し始め、傾斜角度30度以上の場所に立地する遺跡は正面に平地を持ち背後に斜面を持つ場所に立地する傾向

がみられる。地形分類図と比較すると台地や丘陵地と扇状地性低地の境界付近にあたるため、縄文時代前期になると居住域に変化が現れると予想出来る。

(3) 地形分類

岩手山周辺の縄文時代早期から前期までの遺跡が立地する場所は、主に小起伏火山性丘陵地・小起伏山地・岩石台地・段丘・扇状地性低地であった。領域Aでは縄文時代早期では火山性丘陵地に遺跡数が多かったが、縄文時代前期になると扇状地性低地に立地する遺跡が多くなる。しかし扇状地性低地に立地する遺跡は、扇状地性低地と小起伏火山性丘陵地との境界付近に立地する遺跡が多いことから、縄文時代前期になると低地に近い場所に居住域が移動する傾向がみられる。領域Bでは縄文時代早期から前期まで遺跡が立地する場所に大きな変化は見られず、特に小起伏山地と台地・段丘を多く利用する傾向がみられる。領域Cでも縄文時代早期から前期まで遺跡が立地する場所に大きな変化は見られない。

平笠岩屑なだれの堆積域内にあたる領域Aでは、火山性の丘陵地を積極的に利用する傾向がみられ、東側などにみられる火山性でない山地や段丘を好んで利用しない傾向がみられた。また領域Bでは東側にみられる火山性でない山地や段丘に多くの遺跡が立地する傾向がみられる。

(4) 分析を踏まえての仮説

岩手山周辺の3つの地域において縄文時代早期と縄文時代前期に分けて、標高・傾斜角度・地形分類の地理的分析を行った結果3つの仮説が浮上した。仮説①が縄文時代早期では傾斜角度30度以下の場所に遺跡が立地していたが、縄文時代前期になると傾斜角度30度以上の場所にも遺跡が立地し始める。そのため、縄文時代早期から前期にかけて居住地の選択に、変化が起きているのではないか。仮説②が主に領域Aと領域Bで縄文時代早期と縄文時代前期では遺跡が立地する場所に変化があり、領域Aと領域Bでは遺跡の立地する場所に類似性も見られる事から、遺跡が立地する場所が変化するのは他の地域と関わりがあった可能性がある。仮説③が平笠岩屑なだれの堆積している領域Aでは、平笠岩屑なだれの堆積後の縄文時代前期になると、平笠岩屑なだれの堆積域を囲むように遺跡が立地する傾向がみられる。平笠岩屑なだれの堆積域を囲むように立地する前期の遺跡は若干の変化はあるが、基本的に縄文時代早期の領域Aの

遺跡立地条件に類似するため平笠岩屑なだれに関与した人々であった可能性がある。

7. 考察

(1) 仮説①

縄文時代早期中葉では宮城県白石市松田遺跡が扇状地の川岸の微高地に立地しており(相原2001)、山形県では米沢市の二夕俣A遺跡をはじめとした盆地周縁に遺跡が多く立地している。また山形県の大畑山遺跡や弓張平A遺跡などは山腹の高地に遺跡が立地しており、山形県の石田遺跡など山間の低地にも遺跡がみられる(小林2001)。このことから縄文時代早期中葉の遺跡は扇状地や盆地などの低地に多くの遺跡が立地し、山腹の高地や山間の低地などからも遺跡が発見されている。

縄文時代早期末葉から縄文時代前期前葉では秋田県能代市の寒川1遺跡は縄文時代早期末の遺跡で馬の背状の台地上に立地しており(小島・小林2001)、宮城県名取市今熊野遺跡は縄文時代前期前葉の遺跡で平坦な台地の上に立地する(相原2001)。このことから縄文時代早期から縄文時代前期前葉までは台地上に遺跡が立地するようである。

縄文時代前期中葉以降では、秋田県杉野台遺跡や上ノ山遺跡では台地の縁辺に大型住居をつくるなど台地縁辺に遺跡が立地する(小島・小林2001)。このことから縄文時代前期中葉以降では、台地の縁辺から低地性の微高地に遺跡が立地するようである。そのため時代ごとに遺跡の立地する場所はA縄文時代早期→B縄文時代早期末葉から前期前葉→C縄文時代前期中葉以降、A扇状地や盆地などの低地や山間部→B台地上→C台地縁辺へと変化している。

東北地方では縄文時代中期中葉では扇状地や盆地などの低地に遺跡が多く立地し、縄文時代前期では台地上に遺跡が多くなる傾向が示されていた。対象地域において分析した結果では縄文時代早期では標高200m以下に遺跡が多く立地しており、縄文時代前期では標高200m以上に立地する遺跡も多くなっている。岩手山周辺の河岸段丘の標高が200m以上になるため(森野1996)、台地や段丘上で生活するために標高200m以上の場所に遺跡が多くなっていると考察できる。

また分析結果から縄文時代前期になると傾斜角度30度以上の場所に遺跡が多くなり、領域Aでは扇状地性低地と小起伏火山性丘陵地の境界に遺跡が多くなり、領域Bでは小

起伏山地や段丘や台地上に遺跡多くなる。小島・小林氏によれば、縄文時代前期中葉以降では台地の縁辺部や低地に遺跡が多くなると述べられている。縄文時代前期になり傾斜角度30度以上の場所に遺跡が多くなるのは、小島・相原氏が述べているように台地の縁辺に立地する遺跡が多くなるため、傾斜角度30度以上の場所に遺跡が多くなると考察できる。また領域Aで扇状地性低地が多くなり領域Bで小起伏山地や台地・段丘に遺跡が多くなるのも、この台地の縁辺に立地する遺跡が多くなることに関係しているだろう。領域Aでは縄文時代早期に小起伏火山性丘陵地に立地する遺跡が多く、縄文時代前期中葉に台地の縁辺に遺跡を形成するようになったため、小起伏火山性丘陵地と扇状地性低地の境界に遺跡が立地するようになった。また領域Bは領域Aとは逆に縄文時代早期では小起伏火山性丘陵地や小起伏山地と扇状地性低地に立地する遺跡に大きな差がないが、縄文時代前期では小起伏山地や小起伏火山性丘陵地に立地する遺跡が多くなることから、小島・小林氏による縄文時代早期末から前期にかけての遺跡立地条件の通りに、台地上に立地する遺跡が多くなるようだ。

以上のことから東北地方の縄文時代早期から前期にかけて、扇状地や盆地などの低地や山間部→台地上→台地縁辺と遺跡の立地する場所が変化することは、対象地域における分析結果とほぼ一致しそうである。しかし当初の仮説では傾斜角度30度以上の場所に立地する遺跡は正面に平地を持ち背面に傾斜地を持つと推測していたが、実際には台地の縁辺部に遺跡を形成するため傾斜角度が高くなっていたと考察できる。また対象地域からは少し離れるが岩手県住田町の館遺跡では斜面上に遺跡が立地し、奥州市の大清水上遺跡では扇状地の扇頂部に遺跡が立地することから(須原2007)、領域Aにみられる扇状地性低地と小起伏火山性丘陵地の境界に遺跡が立地する傾向に当てはまるだろう。

(2) 仮説②

縄文時代前期から縄文時代中期の東北地方は、大きく2つの土器文化圏に大分されている。1つ目が東北地方の北部を文化圏とする円筒系文化で、2つ目が東北地方の南部を文化圏とする大木系文化である。

円筒系文化と大木系文化は、本論文で対象となる平笠岩屑なだれの堆積後付近である縄文時代前期初頭から、土器形式に変化が現れ始めた。まず円筒系の赤御堂式土器が平笠岩屑なだれの堆積時期とほぼ同じ時期に作られ

はじめ、その時期は縄文時代早期末葉にまでなりそうである。次に縄文時代前期初頭大木1式土器が誕生し大木2a式土器へと形式が変化し、大木1式土器が誕生した時期に円筒系の先駆けとなる早稻田6類土器などが作られ始める（早瀬2008、苅野2008）。そしてこの時期に青森県の十和田火山が噴火し中振テフラを噴出し、中振テフラは青森から福島にわたるまで広域に降下した。中振テフラの降下後の縄文時代前期前葉になると大木文化圏では大木2b式土器や大木3式土器が作られ始め、円筒文化圏では円筒下層a式土器が使われ始め円筒下層b式土器も使用されるようになる（星2002）。

対象地域では特に縄文時代前期初頭から縄文時代前期前葉にあたる土器が大量に出土しているが、土器形式がはっきりとしない個体が多いのが現状である。そこで本稿で注目するのは、大木系の大木1・2式を構成する要素の1つとなる羽状縄文という文様である。

対象地域で発掘調査が行われた遺跡を細かい時期で見てみると、仏沢遺跡で縄文時代前期初頭の円筒系の土器形式である赤御堂土器と早稻田6類土器が出土している。また赤御堂式土器の特徴である表裏縄文の文様を持つ土器（金子2001）が、仏沢遺跡周辺の室小路遺跡と大館遺跡で出土しているため、この時期は円筒系の文化を持つ人々が居住していた可能性がある。しかし、その後は大木1式土器や2a式土器の可能性がある土器や大木2b式土器など、縄文時代前期前葉の土器形式が小日谷地遺跡から出土し始める。そしてこの時期には各遺跡から羽状縄文の文様を持つ土器が多く出土し始めるが、円筒系の土器は一遺跡を除いて出土しなくなることからこの時期は大木系の文化的要素が強くなっていたことが考察できる。

縄文時代前期中葉の大木3～4式土器の時期は対象地域に限らず、岩手県全体で遺跡数が減少する傾向がみられ（金子2001）、対象地域においてもこの時期と断言できる土器は出土していない。縄文時代前期後葉になると東北地方全体でも遺跡数が増え始める傾向があり、対象地域でも縄文時代前期後葉の土器形式を持つ個体が出土し始める。仏沢遺跡や芦名沢遺跡では円筒下層d式土器が出土しているほか、多数の遺跡で大木6式土器や円筒下層d式土器など縄文時代前期後葉の土器が出土している。対象地域では縄文時代前期後葉になると、大木系の土器と円筒系の土器が同じ遺跡から共伴して出土し、対象地域においても2つの土器が混ざり合いながら出土している。

以上のことから、対象地域では縄文時代前期初頭は円筒系の土器が出土しており、縄文時代前期前葉では大木系の土器が出土している。縄文時代前期中葉では東北地方全体で遺跡数が減少する傾向がみられ対象地域においても出土遺物が少なくなるが、縄文時代前期後葉になると遺物量が増え大木系の土器と円筒系の土器の両方の土器が共に出土したようである。

出土する土器が時期ごとに、円筒系→大木系→大木系と円筒系と変化している。また円筒系→大木系と使用する土器が変化したのち、同じ時代の中で2つの土器型式の土器が使用され、同じ遺跡から2つの土器型式が確認されている。また縄文時代前期後葉では大木系と円筒系の土器が同じ時代に対象地域の中で同時に確認でき、更に同じ遺跡か

	大木系土器	円筒系土器
縄文時代早期	物見台式～ムシリ1式など	
縄文時代前期初頭	平笠岩肩なだれ	
縄文時代前期前葉	大木1～大木2a	表館～早稻田6類など
縄文時代前期中葉	十和田中振テフラ	
縄文時代前期後葉	大木2b～大木3	円筒下層a～円筒下層b
縄文時代前期後葉	大木4～大木5	円筒下層c
縄文時代前期後葉	大木6～大木7	円筒下層d

図30 大木式土器と円筒式土器の変遷（星2002・早瀬2008・苅野2008を参考に筆者が作成）

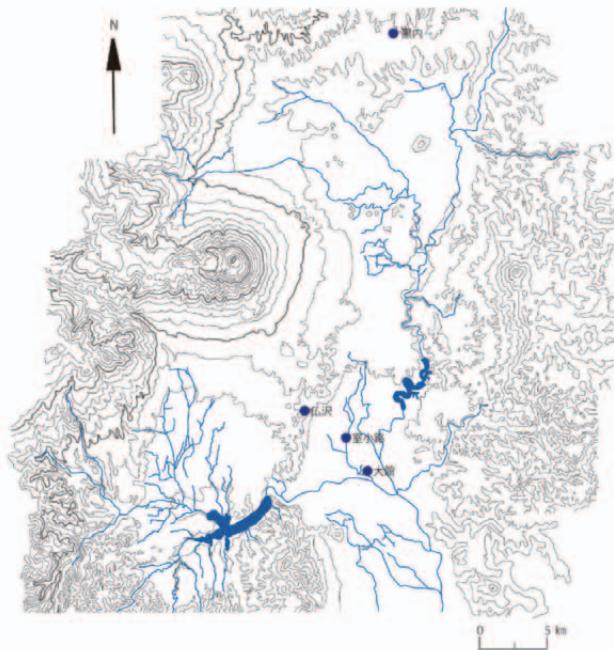


図31 縄文時代早期末葉から前期初頭の円筒系土器出土遺跡の分布図

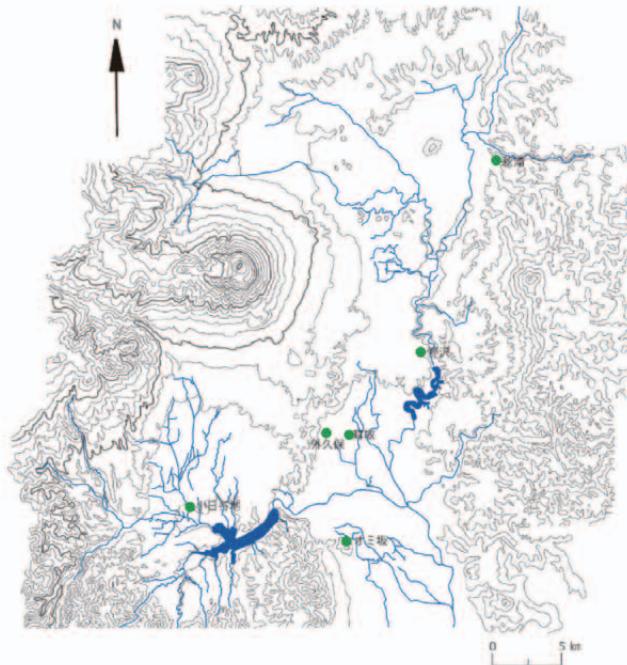


図33 縄文時代前期後葉の大木系土器出土遺跡の分布図

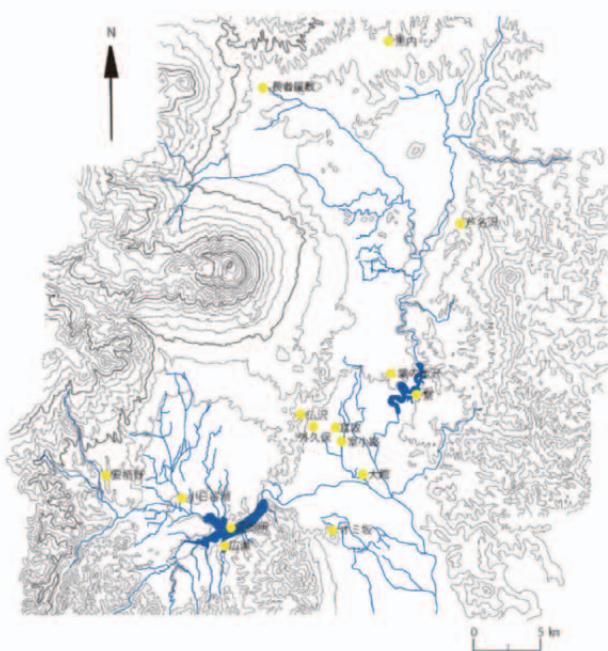


図32 縄文時代前期初頭の大木系土器出土遺跡の分布図

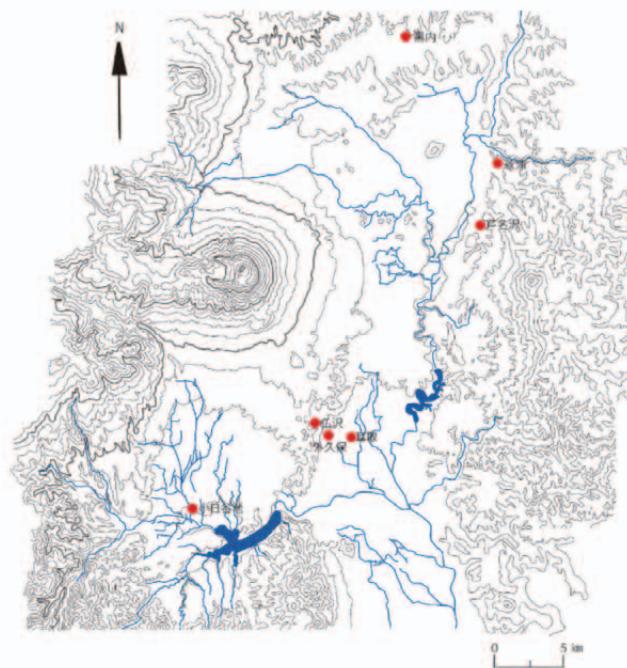


図34 縄文時代前期後葉の円筒系土器出土遺跡の分布図

ら共伴するように出土している。また縄文時代前期後葉以前では、このような事例は見られなかった事から、この時期になってから別の土器型式を持つ人々が同じ地域や遺跡で生活を共にし始めたと推測出来る。縄文時代前期後葉まで

は2つの土器型式を持つ人々が入れ違うように居住し、前期後葉になって共に生活を始めた結果、領域Aと領域Bにおいて遺跡の立地する場所に類似性や変化があったと考えられる。

(3)仮説③

平笠岩屑なだれの堆積域にあたる領域Aで、発掘調査が行われた遺跡は4遺跡あり、そのうち縄文時代前期初頭～前葉に位置付けられる遺跡が3遺跡ある。縄文時代前期初頭にあたる時代は、領域A以外では円筒系の土器が出土しているが、この3遺跡では他の遺跡では見つかっていない前期初頭の土器が出土している。さらに縄文時代前期初頭で円筒系の土器が出土しているのは対象地域の領域Cであり、大木系の土器が出土しているのは対象地域の領域Aであることから対象地域の領域Aと領域Cでは文化に違いがあると考察できる。

対象地域の領域Aにおいて縄文時代前期初頭～前葉の時期で、大木系の特徴を持つ遺跡として黒内Ⅲ遺跡と芦名沢I遺跡が挙げられる。対象地域の南側では前期初頭に赤御堂土器や早稻田6類土器など円筒系の土器が出土しているが、黒内遺跡では大木1式土器と大木2a式土器が土坑内から出土している。また芦名沢I遺跡では大木式土器と明記はされていないが、仮説②で触れた前期初頭の羽状縄文を持つ土器が、縄文時代前期初頭～前葉に使用された堅穴住居2棟から出土している。堅穴住居から出土した羽状縄文を持つ前期初頭の土器は、前期初頭の大木1式土器などが多くみられるループ文などが施文されていることから大木系の特徴を持つ遺跡である可能性が高い。

また黒内Ⅲ遺跡や芦名沢I遺跡と同じく、領域Aで発掘調査が行われた前期初頭の遺跡として長者屋敷遺跡がある。長者屋敷遺跡でも縄文時代前期初頭の遺物を含む堅穴住居が検出されており、縄文時代前期前半だけで100棟以上の堅穴住居が確認されている。堅穴住居からは前期初頭の大木1式の可能性がある土器と大木2a式土器が出土している。前期初頭の遺構が確認されているのは対象地域では領域Aだけである。これらの事から平笠岩屑なだれの堆積後にも領域Aで継続して生活していたことや、領域Cとは別の土器型式を持つ集団であったといえる。

(4)小結

仮説①で触れた様に縄文時代早期から縄文時代前期にかけて、扇状地や低地→台地上→台地縁辺と遺跡が立地する場所の傾向が対象地域にもみられる。しかし縄文時代前期の領域Bでは遺跡が立地する標高が1番低い場所が標高140mであり、遺跡が多く立地する場所で標高が1番高いのは標高290mである。しかし縄文時代前期の領域Aで遺跡が立地

する標高1番低い場所が170mになり、遺跡が多く立地する場所で標高1番高いが標高380mとなっており、領域Bと領域Aでは遺跡が立地する場所で60m近い比高差がある。また仮説①で触れた周辺の地域の縄文時代前期の遺跡でも遺跡の立地条件が一致する遺跡は多いが、標高300m以上に遺跡が立地する遺跡は見られない。平笠岩屑なだれ堆積域にあたるため低地に遺跡が形成されなかったことは考慮すべきだが、領域Aは遺跡の立地する高さから特異性がみられるだろう。

井上氏は平笠岩屑なだれの堆積後に岩手山の領域C（おそらく本稿の領域Bと領域Cであろう）に、縄文時代前期初頭の遺跡が多くなるため平笠岩屑なだれの災害に対応する行動だと推測している。遺跡分布図だと、領域Bでは早期の42遺跡から前期の64遺跡と20遺跡近く遺跡数が増えており、割合でみると1.5倍増えている。しかし領域Aでは早期8遺跡から前期21遺跡と遺跡数が13遺跡増えており、割合でみると3倍近くに増加している。全体的に縄文時代早期から縄文時代前期にかけて遺跡数が増加しているため、縄文時代早期から縄文時代前期における遺跡の増加を平笠岩屑なだれの影響のみである考えることはできない。図31の縄文時代前期初頭の大木系土器出土遺跡の分布図をみると、対象地域全域に遺跡が多く分布しているが、前期初頭の大木1式土器を出土する遺跡があるのは領域Aである。また堅穴住居を持つ遺跡があるのは領域Aだけであるため、井上氏が述べるような平笠岩屑なだれの堆積後に岩手山の南側への移動だけだったとは考えにくい。

対象地域の領域Cにおいては縄文時代前期初頭に、円筒系の土器が出土する遺跡が多い中で、対象地域の領域Aでは大木1式土器を伴う土坑を持つ遺跡や大木系の土器であろう個体を伴う堅穴住居が検出される遺跡がある。また対象地域の領域Aでも東北地方全域にみられる遺跡の立地条件の変化がみられるが、対象地域以外や対象地域の領域B・領域Cと比較しても、標高の高い場所に遺跡が立地する傾向がみられる。また対象地域の領域Bと比較すると、領域Aの方が縄文時代早期から前期にかけての遺跡が増加する割合が高いことが分かる。

それらのことから主に前期初頭の大木系の土器を持つ人々は、平笠岩屑なだれの堆積した領域Aを選択して居住していただろう。また領域Aの遺跡は他の地域と比較しても標高の高い場所に遺跡が立地し、岩屑なだれの堆積後にも岩屑なだれの堆積域周辺の高地で生活していた可能性が

高い。また対象地域の領域Aに分布している他の遺跡も、黒内遺跡や芦名沢遺跡や長者屋敷遺跡と同じ文化を持つ人々であった場合、岩屑なだれの堆積後に岩屑なだれの堆積域の周辺で岩屑なだれの堆積域周辺の高地に遺跡が立地し、生活を継続していたという事例は、岩屑なだれに対する災害適応の1つの事例であるといえるだろう。

8. 結論

仮説①の検証により縄文時代早期から前期の東北地方にみられる一般的な居住域である扇状地などの低地→台地上→台地の縁辺と、対象地域における居住域の変化がほぼ一致することが分かった。仮説②の検証により縄文時代早期から前期初頭では円筒系の土器が多く、縄文時代前期前葉では大木系の土器が多くなり、縄文時代前期後葉になると円筒系の土器と大木系の土器が混ざり合い出土することが分かった。また縄文時代前期後葉には、大木系と円筒系の両方の土器が共に出土することから、前期後葉以前は双方が入れ違うように居住し、前期後葉以降共に生活するようになったのではないか。そのため領域Aと領域Bでは、遺跡が立地する場所に類似性や変化がみられたと推測できる。

仮説③の検証により地理的分析から領域Aは領域Bと領域Cとは居住域に違いがあり、土器形式による考察から縄文時代前期初頭で領域Aは領域Bと領域Cとの間で違いが生じると考えられる。また領域Aで発掘調査が行われた遺跡では平笠岩屑なだれの堆積後の縄文時代前期初頭の遺構が見つかっており、平笠岩屑なだれの堆積域周辺の高地で生活していた痕跡が見つかっている。

これらの事から平笠岩屑なだれの堆積域にあたる領域A、即ち岩手山北側の地域では他の地域と違い、遺跡の立地する場所が岩屑なだれの堆積前後で変化が少なく、岩屑なだれの堆積後にも遺跡数の増加が見られる。また岩屑なだれの堆積後の縄文時代前期初頭から前葉にかけて、他の地域とは使用している土器型式が異なっており、北側の地域にのみ住居跡などの遺構が確認されている。

そのため井上氏が平笠岩屑なだれの堆積後に岩手山の南側に移動すると推測した先行研究のように、岩屑なだれの堆積後に他の地域に移動するだけではなく、岩屑なだれの堆積域周辺で生活を続けていたといえるだろう。岩屑なだれの堆積後に岩屑なだれの堆積域周辺の高地で生活を行うのは、岩屑なだれに対する適応形態の1つの事例であるといえるだろう。

9. おわりに

本稿の対象地域の北側の地域の低地にある縄文時代早期の遺跡は、ほとんどが平笠岩屑なだれによって厚く覆われており全貌が見えていない。そのため実際に縄文時代早期の遺跡がどこに分布していて、どんな土器を使用して生活していたのか分からず。そのため今後の技術の発達により、平笠岩屑なだれの下層に埋まっている縄文時代早期の遺跡が発見され、当時の生活が明らかになり新しい発見があるだろう³⁾。

本稿は2016年度に芸術学部歴史遺産学科に提出した卒業論文を書き改めたものである。長井謙治先生には、学部から終始一貫して指導いただいた。さらに盛岡市遺跡の学び館の神原雄一郎氏、滝沢市埋蔵文化財センターの井上雅孝氏、岩手県埋蔵文化財センターの川又晋氏には岩手山・岩手山周辺の遺跡情報に関する資料提供及び、多大なご指導を携わり大変お世話になりました。記して深く感謝申し上げます。

註

- 1) (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの作成した、岩手県遺跡検索システム2015年度を参考としている。
- 2) 分布図の作成には岩手県遺跡検索システムを主に使用し、一部自治体で出版している埋蔵文化財発掘調査報告書を参考にしている。またこの分布図に記されている遺跡は遺構等が検出されている集落跡だけではなく、遺物散布地や表面採取地も含まれている。
- 3) 本稿を作成するうえで岩手県の遺跡情報検索システムを使用したが、縄文時代とのみ表記されており詳細な時代区分がされていないものや、土器形式の不明な遺跡は分析に使用していない。また散布地等で土器形式の公表されていない遺跡の遺物は、最終的な考察からは外している。更に時期が特定しやすい土器を分析の対象としており、石器や遺構など土器以外の文化的要素に対しては一切分析を行っておらず、考察にも含めていない。

【引用・参考文献】

- 相原淳一 2001「宮城県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』 PP.87-108 縄文時代文化研究会
 井上雅考 2009「岩手山降下火山灰と縄文土器 滝沢村出土の縄文土器と分火山灰の関係」『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』 PP.31-61 盛岡市遺跡の学び館

金子昭彦 2001「岩手県における縄文時代集落の諸様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」 PP.53-72 縄文時代文化研究会

苅野嘉雄 2008「円筒下層式土器」「総覧縄文土器」 PP.218-225『総覧縄文土器』刊行委員会

神原雄一郎 2009「盛岡市における縄文時代草創期・早期の土器 大新町遺跡出土土器を中心とした盛岡の土器」「盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化」 PP.71-178 盛岡市遺跡の学び館

北村忠昭・丸山浩治 2009「縄文時代(1)草創期・早期」「岩手考古学」第20号 PP.23-32 岩手考古学会

国土地理院 2014「1:25,000火山土地条件図「岩手山」解説書」「国土地理技術資料」D2-No. 61 国土地理院

小島朋夏・小林 克 2001「秋田県における縄文時代集落の諸様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」 PP.73-86 縄文時代文化研究会

小林圭一 2001「山形県における縄文時代集落の諸様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」 PP.109-132 縄文時代文化研究会

零石町史編集委員会 1986『零石町史』 PP.24-27 零石町

須原 拓 2007「縄文時代/前期の大型住居について～大木式土器 文化圏の事例を中心に～」「(財)岩手県振興事業団埋蔵文化財センター紀要」XXVI PP.25-42 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

橋 行一 1978「「岩手森」「五百森」の多くの流れ山を生じた岩手火山の縄文期の噴火活動と泥流」「岩手大学教育学部研究年報』第38巻 PP.119-226 岩手大学

土井宜夫 2000「岩手山の地質—火山灰が語る噴火史—」 PP.123-133 岩手県滝沢村教育委員会

西根町史編集委員会 1979『西根町史』 PP.183-191 西根町

早瀬亮介 2008「前期大木式土器」「総覧縄文土器」 PP.226-233『総覧縄文土器』刊行委員会

星 雅之 2002「縄文時代前期十和田中撫テフラ降下期集落の検討—岩手県山田町沢大I遺跡の考察—」「(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要」XXI PP.1-52(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

星 雅之・苅野嘉雄 2006「十和田中撫テフラからみた円筒下層式土器成立期の土器様相」「植生史研究」特別第2号 PP.151-180 日本植生史学会

町田 洋 1977「火山灰は語る 火山と平野の自然史」 PP.26-38 蒼樹書房

丸山浩治 2015「考古学手法を用いた火山災害研究—10世紀の巨大噴火と東北地方北部における人類活—」「考古学研究」第62卷 第2号 PP.43-55 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

村木 敬・米田 寛 2009「旧石器時代」「岩手考古学」第20号

PP.11-22 岩手考古学会

盛岡市遺跡の学び館 2006『盛岡市遺跡の学び館 第4回企画展玉山の遺跡』 盛岡市遺跡の学び館

森野泰行 1996「岩手火山起源の大規模岩屑流の層序と地形変化」「駒澤地理」No.32 PP.83-105 駒澤大学

【参考発掘調査報告書一覧】

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1980『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和54年度分)岩手県埋文センター文化財調査報告書』第9集 PP.94-101 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1980『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 西根町崩石遺跡岩手県埋文センター文化財調査報告書』第11集 PP.101-108 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1980『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 松尾村長者屋敷遺跡(I)(遺構編)岩手県文化埋文センター文化財調査報告書』第12集 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1980『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書』第13集 PP.13-25 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書』第28集 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書』第31集 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1984『長者屋敷遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)(遺物編・本文)岩手県埋文センター文化財調査報告書』第77集 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994『黒内Ⅲ・黒内Ⅳ遺跡発掘調査報告書 岩手県文振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第208集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998『オミ坂遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第289集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『芦名沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第295集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『芦名沢Ⅱ

遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告
 書』第322集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『安栖野遺
 跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告
 書』第324集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『秋浦 I 遺
 跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告
 書』第346集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『秋浦 II 遺
 跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告
 書』第347集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 零石町教育委員会 2000『小日谷地 I B 遺跡発掘調査報告書 零石
 町埋蔵文化財調査報告書』第2集 零石町教育委員会
 滝沢村教育委員会 1986『耳取遺跡 岩手県滝沢村文化財調
 告書』第3集 滝沢村教育委員会
 滝沢村教育委員会 1988『外久保 I 遺跡 岩手県滝沢村文化財調
 查報告書』第8集 滝沢村教育委員会
 滝沢村教育委員会 1990『葉の木沢 I 遺跡 岩手県滝沢村文化財
 調査報告書』第15集 滝沢村教育委員会
 滝沢村教育委員会 1999『室小路土地区画整理事業発掘調査報告
 書—室小路1・7・11・15・16遺跡— 岩手県滝沢村文化財調査報告
 書』第31集 滝沢村教育委員会
 滝沢村埋蔵文化財センター 2008『仏沢Ⅲ遺跡—平成2年度発掘
 調査報告書— 滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書』第3集
 滝沢村埋蔵文化財センター
 盛岡市教育委員会 1986『大館遺跡群(大新町遺跡・大館町遺跡)—
 昭和60年度発掘調査概報』 盛岡市教育委員会
 盛岡市教育委員会 1997『大館遺跡群(大館町遺跡)—平成6・7年
 度発掘調査概報』 盛岡市教育委員会
 盛岡市教育委員会 1998『繁遺跡—平成8年度発掘調査概報』
 盛岡市教育委員会

